

スタンフォード大学滞在記



若 者

福 本 能 也*

My Stay in Stanford University

Key Words : Stanford University, Visiting Scholar, Department of Chemistry

1. はじめに

筆者を乗せ関西国際空港から飛び立った飛行機は、予定通りサンフランシスコ国際空港に到着する。出国前知人に、「飛行機が左旋回する時、窓から下を見るように」と言われたことを思い出し、窓の外を見た。目に飛び込んできたのは“STANFORD”の赤い文字であった。それはFootball Stadiumの芝生に描かれたもので、少し離れたところに多くのスペイン風の建物を見つけた。これが、私が初めて目にしたスタンフォード大学であった。

私は2000年4月から1年間、文部省在外研究員としてスタンフォード大学化学科に滞在した。受け入れ先はRobert M. Waymouth教授で、当時40歳になったばかりの新進気鋭の化学者である。私は彼のもとで新しい高分子合成触媒の開発に携わった。

2. Stanford University

スタンフォード大学の開学は1891年で、歴史は浅い。鉄道王Leland Stanfordが一人息子の教育のために設立した財団が母体である。スタンフォード大学関係者のE-メールアドレス…@leland.stanford.eduのドメインの由来がお判りであろう。しかしその息子Leland Stanford Jr. はイタリア留学中わずか15才で亡くなった。その死を悼み大学の名称を“The Leland Stanford Junior University”としたそうである。現在では“Stanford University”が

正式名称のようだが、校章やdiplomaに設立当初の名が残っている。

大学にはMain Quadと呼ばれる建物群を中心に数多くの建物がある。ほとんどの建物には人の名前が冠されており、名前だけではそこでどのような研究がされているのかわからない。建物のデザインは基本的に赤橙色の屋根瓦にベージュ色の外壁で統一されている。この建築様式は、“Spanish Style”や“Mission Style”と呼ばれているが、正確には“Richardsonian Romanesque”と呼ぶそうだ。Main Quadには教会(Memorial Church)があり、土日にもなるとよく結婚式が行われていた。幸いなことに筆者も結婚式に出席する機会を得た。パイプオルガンの音色とAve Mariaの独唱は忘れられない。Main Quadの前にはThe Ovalと呼ばれる芝生広場がある。学生たちがここでバレーボールを楽しんでいる姿をよく見かけた。さらにその前をPalm Driveと呼ばれるまっすぐな道が走っている。約1kmもあるこの道の両側には、名前の由来どおりpalm treeが植えられている。私は毎日この道を自転車で通った。またMain Quadの隣にはHoover Towerと呼ばれる塔があり、最上階から大学を見渡すことができる。大学には多くの観光客が訪れていたが、Memorial Churchを見学し、Hoover Towerから大学を眺め、両方の前で写真を撮り、bookstoreで土産を買う、のが定番の見学コースのようであった。

大学の学生数は、undergraduate studentが約6500人、graduate student が約7500人とそれほど多くない。生徒数だけで考えると中規模大学であるが、graduate studentのほうが多いのは、やはりアメリカを代表する研究大学の一つである。その上Post Doc. や私のようなVisiting Scholarを含めれば研究している学生・研究員はもっと多い。

研究環境は申し分ない。日本では10人近く押し込

* Yoshiya FUKUMOTO
1967年1月生
1995年大阪大学大学院・工学研究科・
応用精密化学専攻修了
現在、吹田市山田丘2-1 大阪大学
大学院・工学研究科・分子化学専攻、
助手、博士(工学)、有機合成化学
TEL 06-6879-7398
FAX 06-6879-7396
E-Mail fukumoto@chem.eng.
osaka-u.ac.jp



まれそうな部屋を3~4人で使う。一人々々にドラフトチャンパー(排気装置付きの実験台)が与えられ、実験はすべてその中で行われる。当然部屋には試薬の臭いはしない。(もっとも、先進国の中でドラフトチャンパーを使わず実験している国は日本くらいである。)実験器具もstockroomへ行けば大方のものは手に入る。もっとも感心したのは薬品の廃棄である。大学には廃棄物処理専門の部局があり、我々がある程度分別しておけばすべて回収・廃棄してくれる。試薬の廃棄でいつも頭を痛めている日本の(阪大の?)化学関係者には羨ましい限りである。

研究室での生活も日本とは異なる。研究室が『不夜城』となることはない。毎朝8時ごろから集まり始め、9時には全員揃う。各々実験後、6時~6時半ごろにはほとんど誰もいなくなる。5年間で結果を出せばよい、という時間的な余裕があるからだろうか。夜遅くまで実験していたのは、直前に中間報告が控えている連中と、私だけであった。

研究以外にも楽しいことがたくさんあった。夏には毎週金曜日に化学科の学生主催の野外パーティーが開かれた。パーティーと言っても、研究室持ち回りでハンバーガーを作って全員に振る舞い、喋っているだけである。『研究室、学年を越えて多くの友人を作ると共に、日頃の憂さを晴す』のがこの企画の趣旨らしい。ハンバーガーは不味かったが、多くの人と知り合うことができた。また学科主催のクリスマスパーティーも開かれた。こちらは料理もよく、瞬く間に楽しい時間が過ぎた。

結局、1年間の研究成果はあまり芳しいものではなかった。Waymouth教授からは、「Visiting Scholarには全く新しいことに挑戦してもらっている。よい結果がでなかったからといって責任を感じることはない。」と言ってもらったが、研究者としては情けない限りである。私の専門とは少し異なる分野の研究だったので最初は戸惑うことも多かったが、雑務に追われることなく化学だけに専念できた本当に楽しい1年であった。

3. 生 活

ここからは大学以外ことについて書きたい。スタンフォード大学はパロアルト市(Palo Alto)にある。人口55000人の小さな街であるが、大学の隣にはHewlett-Packard社の本社もあり、財政的に潤っているようだ。治安も非常によい。週末ともなれば

夜12時を過ぎてもpubから人が溢れている。女性が夜一人で歩いても大丈夫のようである。観光地へのアクセスもよい。サンフランシスコへは車で1時間、水族館で有名なモンレーへは2時間、ヨセミテ国立公園へは4時間で行ける。カリフォルニアには3000m級の山がたくさんあり、冬になればスキーもできる。気候について、夏の暑さは日本とそれほど変わらないが、湿度が低いので暑さはそれほど苦にならない。ただ、1日だけ109F(=43℃)という日があった。この日だけは昼食も買いにいかず、空腹に耐えながら実験していた。日差しは日本より強いように思えた。サングラスは必須である。冬はあまり寒くない。大阪での3月中旬頃の気候と考えてもらえばよい。ただし12月中旬から3月中旬まで雨が続く。傘が必要となるような雨はあまり降らないが、一旦強い雨が降るとたちまち道路が冠水し、ひどい時は通行止めとなる。排水設備が悪いためである。

アメリカの料理は不味いとよく言われるが、大学周辺の店はそれほど悪くはなかったように思う。様々な国の人々が集まる土地柄ゆえ、各国料理が味わえた。ただし、それなりの金額を払えば、である。食材に関しても同様である。高級スーパーマーケットへ行けば日本人の口に合う牛肉を買うことができた。もちろん豪勢な買い物も毎日していたわけではない。不味いと言えば、学内のカフェはひどかった。アメリカ人学生も異口同音に不満を口にしていた。

近くには日系食料品店も幾つかあり、時々お世話になった。値段もそれほど高くはなかった。各品目に対して商品が1,2種類しかないのは仕方がないであろう。商品には英訳された品目名も書かれており、ちょっとした英単語の勉強になったが、ワカメにも昆布にももずくにも、“seaweed”と書かれていたのには苦笑した。ちなみに味付け海苔は“seasoned seaweed”, 昆布の佃煮も“seasoned seaweed”である。

ここまではよいことばかり書いたが、大問題が一つある。それはアパートの家賃があまりにも高いことである。one-bed room(キッチン, リビング, 寝室×1)で月々\$1,600(=約¥190,000), Studio(日本でいうワンルームマンション)でも\$1,000(=約120,000)は下らない。原因はIT景気である。大学からサンノゼにかけての一带、いわゆるシリコンバレーにはIT関連のベンチャー企業が数多くある。それらが好景気に乗って雇用を増やした結果、アパー

トの供給が追いつかなくなったが、相変わらず需要は減らない。それに味をしめた貸主が家賃を大幅に吊り上げたそうである。

4. 運 転 免 許

アメリカでの生活に車は必須である。私も国際免許証を取得してから渡米した。ところが渡米後次のような噂を聞き、大いに慌てさせられた。それは、「運転免許取得希望者は、カリフォルニア州に到着後ある『期間』内に免許を取得しなければならない。各国が発行する国際免許証は、その『期間』が過ぎれば失効する。」である。この『期間』は諸説あり、長くて2ヶ月、短いでは2週間以内、と聞いた。2ヶ月はともかく、2週間以内での免許取得は不可能である。そこで真偽を調べてみるとやはりデマであった。確かに州の法律には「2週間以内に取得すること」と明記されているらしいが、合法的に入国している外国人に対しては特例で適用されず、国際免許証も書面どおり1年間有効であった。筆者が車を購入した店のディーラーによると、確かに過去には誤って検挙された人がいたらしいが、この特例が定められてから結構な年月が経ているらしく、今では噂のみが残っているらしい。

それでは免許を取得しなくて大丈夫か、といえは残念ながらそうではない。他州(すべての州ではない)とは異なり、カリフォルニア州の運転免許証がないと自動車保険に加入できないのである。結局、自動車保険に加入するために試験を受けざるをえなかった。なお試験は非常に簡単で、停止すべきところで確実に停止し、左右確認をオーバーアクションで行えば問題ない。

カリフォルニア州での運転免許に関する一番の問題は、免許証をなかなか手にできないことである。試験合格後免許証は郵送されるが、半年待つのは当たり前、10ヶ月近く待っても送られてこなかった人もいた。原因は定かではないが、DMV(Department of Motor Vehicle, 自動車業務全般を扱う部局)職員の仕事の遅さを見れば納得できる。ただし例外が1人いる。私はわずか10日で手にできた。

これも理由はわからない。周りは“miracle!!”と言って驚いていた。

5. 治 療 費

私は初めて救急車に乗せられた。しかもアメリカで、である。それは実験中に誤って試薬を浴びたためであるが、実は救急車で運ばれるような事故ではなかった。しかしどこで情報が間違ったのか(私の英語力不足によるところが大きいと思われるが)、大事故発生と消防署に連絡されてしまったらしい。その後は正確に説明する間もなく屈強な消防隊員に担架で運ばれ、救急車に乗せられ、点滴を受けながら、スタンフォード大学病院のEmergency roomに運ばれた。さすがに医師は私が軽症であるとすぐわかったのか、しばらくは私ととり止めもない話をしていたが、少々困ったことが起こった。彼は私の病歴を尋ねてきたのである。いわゆる日常会話しか練習していない筆者にとって医学用語なぞわかるはずもなく、すぐにわかったのは「Drug?」くらいであった。当然のことながら大事には至らず、6時間の入院体験は終わった。

後日請求書が送られてきた。アメリカでの治療費が高額なのは知っていたが、改めて驚いた。救急車で500mほど運ばれ、点滴を3本、血液検査2回、心電図、その他諸々で合計\$4,625(=約¥555,000!!)であった。期間の長短にかかわらず、アメリカへの出張の際は一番高い保険に加入することをお勧めする。なお、実験中の事故なので費用は大学が全額負担した。

5. 終 わ り に

帰国してからすでに1年以上経ているので記憶が曖昧になりつつあるが、久しぶりに留学時のことを思い出すよい機会となった。かの地で知り合った人々とは今でも時々連絡を取り合っている。多くの友人、知人を得られたことは今後の糧となろう。またこれを機に、しばらく止めていた英会話の練習を再開しよう、とも考えている。

